

日露戦争史

150781121 吉田柚希

中公新書 横手慎二

世紀転換期の世界

1、19世紀末の戦争

ア) 1894年日露戦争から1904年日清戦争→
ヨーロッパ列強間無戦争

イ) 国際平和会議（オランダのハーグ） □
シア皇帝ニコライ二世の提案

→軍備消滅 平和永続の試み

参加国→イギリス イタリア オーストリア
ドイツ フランス ベルギー ヨーロッパ諸
国 日本 中国 アメリカ

非ヨーロッパ諸国

1、イギリスの戦争

兵器の発達→ 被害増大

ア) 高性能なモーゼル銃

→死者数アフリカの戦争で過去最高

2、アメリカ戦争

キューバをめぐるスペインと戦争→スペイン艦隊を完璧に撃破

パリ講和条約→ キューバ：実質的にアメリカの保護下

3、義和団事件

日ーロッパ列強と中国間→西欧文明の広がりとは災厄の根源
(義和団)

義和団事件と日本

1、日本にとって大きな試練→期待と不安

日本は欧米諸国とともに軍を派遣→一等の国に仲間入りを期待

2、シベリア鉄道の建設

ア) 1882年 ツァーリ・アレクサンドル三世によって建設計画
→1890年に建設開始

→膨大な建設経費が計画実現の妨げ

3、満州について

ア) 満州におけるロシア軍の出兵→日本、イギリス、ドイツの不安増幅

a) イギリスとドイツで揚子江協定

→ロシアの領土拡大反対

→両国の対露接近を阻止（相手国の出方を監視）

1、ロシア側の地誌と地図

ア) ロシアは、未来の戦場について必死で情報蓄積

2、鉄道の利用

ア) 鉄道の建設は、ロシアの能力を飛躍的に高揚

イ) 戦場にいち早く優勢な兵力を集結させるかがカギ

1、満韓交換論

ア) 日露間で韓国問題を巡り奇妙な行動

→韓国を共同保証のもとに中立化を提案（ロ

シア側)

→ロシアの提案に日本は懸念

2、陸軍参謀本部

戦争は不可避→ロシア軍撤兵中止、兵営工事開始

1、」視点の違い

ア) 韓国に向ける日本の権限→ロシア容認すべき
; 日本はロシアの満州権限容認

イ) ロシアは自国の権限拡大→日本に対する強い姿勢



日本側は開戦の準備を開始

1、奇襲

ア) 1904年2月6日 日露外交関係の断絶

ロシアの艦隊（コレーエッツ）（ワリヤーク）日本艦隊から攻撃で沈没

イ) 仁川に無事上陸、京城似南の占領→第一目標

制海権の確保；ロシア太平洋艦隊撃破

ウ) ロシア側；外交関係断絶と宣戦布告は別だったと主張
→不意打ち、驚き

1、二つの国際関係

ア) 日露両国をめぐる国際関係に変化→戦争長引き

: そもそも日本とロシアが戦争の予想をする者は少数

; 他国では、日露の和解に努めた

イ) 学生たちによるデモ行進

戦争中止、専制打倒→政治的意欲が高揚

指導者の無能ぶりに不満

▶ 中途半端な逆襲

▶ ア) 冷夏の中防備固め

▶ 炭火を炊きながらの生活（両国）



▶ イ) ロシア軍による鉄道襲撃→日本軍によってすぐに修復
：成果なし

捕虜（戦場で敵に捕らえられた将兵）

日本軍最も多く獲得→旅順開城の時 4万3975人

➡ 戦争と講和の間

- ➡ ア) 日本海海戦の結果→ロシアは制海権取れず
 - ➡ : 日本を降伏させる可能性なし
- ➡ イ) 日本の樺太占領作戦開始→7月に始まり8月には樺太全土占領

- ➡ 講和条約の締結：終戦に導く会議
- ➡ ア) 1905年ポーツマスで開かれ開始→日本代表：小村寿太郎
- ➡ イ) 日本の求めた事は明瞭
- ➡ 訓令→絶対的必要条件、比較的必要条件、付加条件

➡ 1) 絶対的必要条件

日本とロシアの軍隊を満州から撤退、ロシアの有する遼東半島と鉄道に関する権利を日本に譲渡

➡ 2) 比較的必要条件

➡ 賠償金の獲得、ロシア艦船の引き渡し、樺太の割譲、漁業権の獲得

➡ 3) 付加条件

➡ 極東におけるロシアの海軍力の制限

戦争の帰結：戦時中の社会変化

- ➡ ア) 日本→日比谷焼き討ち事件
 - ➡ A) 講和反対集会（警察官や国民新聞社を襲撃）
 - ➡ : 戦後日本の大衆時代をはっきりと示した
 - : 政党主導の政治が出現
- イ) ロシア→革命を目指す勢力と議会創設
 - 大規模なストライキ（学生、鉄道労働者含み）
 - : 人身の不可侵、言論の自由
 - : 国民が参加する選挙開設

日露戦争とは

- ➡ アジア国家がヨーロッパ大国ロシアを破った大きな事件
- ➡ 他のヨーロッパ諸国に勝てるという自信（日露戦争が生み出した思想）
- ➡ 日本の実力によって韓国併合、満州の権限を獲得と大きな利益